


特別展評価シート(1/3)

施設名	東洋陶磁美術館	展覧会名	特別展「浅川伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美—」
-----	---------	------	---------------------------

概要・実績	目的	<p>本展は浅川伯教(1884-1964)・巧(1891-1931)兄弟を取り上げた過去最大規模の展覧会として、再評価の気運が高まっている浅川兄弟の事跡を、はじめて体系的に紹介しようとしたものである。浅川兄弟関連の作品や資料を多く所蔵し、また優れた韓国陶磁を所蔵する当館にとって、本展覧会の開催は重要な意義を持つものであり、使命ともいえる。</p> <p>「朝鮮陶磁の神様」とも言われた浅川伯教と、朝鮮の工芸研究で知られる浅川巧は、日本における韓国陶磁研究の先駆者である。本展では日韓交流の架け橋ともいえる浅川兄弟の功績とその歴史的意味について実物資料を通じて広く一般に体系的に紹介するとともに、韓国陶磁がなぜ現在のように日本に受け入れられているのか、そのルーツを来館者に提示し、今日にいたる韓国陶磁研究史をいま一度再検討するひとつの契機となることをも目指した。</p>				
	会期	平成23年4月9日～平成23年7月24日		会期	93日間	
	主催	大阪市立東洋陶磁美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会				
	企画・後援					
	協力・助成	E.M.Iネットワーク				
	観覧料	一般1000円・高大生600円	無料対象者	中学生以下、および市内在住65歳以上		
	観覧者総数	23,562人	有料入場	15,517人	(65.9%)	
	作品件数	197件	うち、借用86件	館蔵品111件		
	関連事業	<ul style="list-style-type: none"> ・第21回アフタヌーンレクチャー(1回)、記念講演会(2回)、見どころ解説(のべ6回)、研究会(1回)、《連携》連携講演会(3回)、団体レクチャー(5回) 				
	企画・実施	<ul style="list-style-type: none"> ・(学芸課)小林仁、鄭銀珍 ・大阪市立東洋陶磁美術館、(企画協力)E.M.Iネットワーク 				
成果	<p>浅川兄弟の功績とその歴史的意味を体系的に提示することができ、近代的な韓国陶磁研究を跡づけるうえで、学術的に貢献できた。さらに、忘れられたままだった浅川兄弟の存在を一般の人に広く紹介できた。内容としては、優れた韓国陶磁を展示するのみならず、韓国陶磁への評価がどのように形成されてきたのかも同時に示し、来館者に新たな鑑賞の道筋を提供することができた。ポスターやチラシ等の広報印刷物は、新鮮なコピー(キャッチ・フレーズ)を添え、当初の見込みを超える来館者数につながった。</p>					
補足事項	<ul style="list-style-type: none"> ・浅川兄弟の遺族から単に寄贈を受けるにとどまらず、展覧会を開催することによって寄贈者との関係をさらに緊密にし、それがまた新しい寄贈へと繋がった。 ・学術面では韓国からも反響があり、話題になった。 					

特別展評価シート(2/3)

施設名	東洋陶磁美術館	展覧会名	特別展「浅川伯教・巧兄弟の心と眼—朝鮮時代の美」
-----	---------	------	--------------------------

定量評価	目標	入場者数	予算	外部資金	総事業費	観覧料収入	その他収入	収入合計	図録販売数
	実績	23,562人	13,902千円	—	13,902千円	14,305千円	1,049千円	15,354千円	1,641
達成率	119.4%	110.8%	—	110.8%	122.6%	131.9%	123.2%	109.4%	

定性評価	実績・伝統の継承と新たな魅力創出	評価点	<ul style="list-style-type: none"> 優れた東洋陶磁を収蔵し、調査研究、展示活動に努力してきた美術館の長年にわたる蓄積を十二分にいかすとともに、新たな調査研究の成果や関係者からの寄贈品を巧みに展示し、ストーリー性のある展示を実現したことに敬意を表したい。また、広報についても、22年度の「ルーシー・リー」展での経験を生かして、洗練された、心に届く広報を行ったことも評価したい。 東洋陶磁美術館の展覧会を担当した学芸員の本企画に対する情熱的な取り組みにより、展覧会の内容のひろがりや深みが増した。展覧会は、韓国の研究者から高い関心を示されるものになった。展示と図録により、浅川兄弟の活動や我が国の民芸運動についての貴重なデータを提供した。 浅川兄弟に関する展覧会は何回か開催されてきたが、浅川巧氏に重点を置くものが多かった。この展覧会では、浅川伯教氏に重点を置いて企画され、これまでの展覧会にない切り口をもっている。展覧会では、館蔵資料を有効に活用し、日本民藝館の所蔵の韓国陶磁コレクションと東洋陶磁美術館の所蔵する韓国陶磁を対比して鑑賞できる貴重な機会を実現した。また、展覧会の開催により新たな資料の寄贈を受けるなど、関係者と館の信頼関係により、浅川兄弟に関する資料の充実と研究の蓄積を図るなどの成果をあげた。 巡回展として企画会社や複数の館が関与した企画になっているが、東洋陶磁美術館と東洋陶磁美術館のスタッフの貢献は極めて大きい。
	改善点	<ul style="list-style-type: none"> この展覧会は、東日本大震災の約1か月後に開催されたにもかかわらず、入館者数、収入、図録販売など多くの点で目標数値を上回っている。平成23年度の「ルーシー・リー」展と同様、予想を超える入館者の来館があった。館では、成功要因について既に分析されているが、分析結果を今後の館の運営に十分いかして、新たな観客層とリピーターの確保に努めてほしい。 	
評価	さまざまな来館者への対応	評価点	<ul style="list-style-type: none"> 東洋陶磁美術館の来館者の属性分析が進みつつあり、マーケティングの有益な材料として活用できる状態になりつつあることを評価したい。市外、関西外、国外からの入館者が更に増えることを期待したい。
	改善点	<ul style="list-style-type: none"> 美術館のある中之島地区は、水都大阪に相応しい、落ち着いた場所である。このロケーションをいかした企画を、中之島地区にある複数の文化施設のコラボレーションにより実現してほしい。野外カフェなどの設置により、中之島地区にある美術館の魅力が更に増すことが期待される。 展覧会の広報は、ターゲットを十分意識することで効果が高まる。美術館では、ターゲットを絞る広報に取り組み始めている。今後、戦略性の高い広報になるように更に努力してほしい。陶磁器に関心をもつ者間ではよく知られた存在であるとは言え、まだまだ東洋陶磁美術館を知らない人や入館したことがない人も多い。大阪市はもとより、関西・日本の誇るべき施設として、広く知られるための努力を続けていくことを期待する。稀代のコレクター安宅英一氏のコレクションが基盤になって美術館が設置されたという、この美術館特有の物語性を大事にして、美術館の存在感を一層高めてほしい。 夜間開館は、これまで入館者がなかなか伸びず、実施効果があがらなかったとのことであるが、来館者の見込める時期に絞り込んだ上、複数の施設での実施、広報の充実等により効果のあがる方法を検討し、夜間にも美術品を見る機会を作してほしい。職員の負担が多い場合には、開館時間を繰り下げる等の措置も検討してほしい。 	
連携による総合力の発揮	評価点	<ul style="list-style-type: none"> 大阪歴史博物館との連携により、質の高い講演会が開催できた。また、本展覧会と関係が極めて深い、歴博の展覧会「柳宗悦」の広報を行うなどの連携を図ったことは評価したい。入館者を確保するため、陶磁器に関連の深い機関・団体との連携も図られた。また、本展覧会に直接関連するものではないが、外部の機関との連携協力により、館蔵資料のデジタル化を図っていることを評価する。 	
	改善点	<ul style="list-style-type: none"> 連携先を更に広げるとともに、緊密な連携を図ることにより、美術館の存在感を高め、事業の質の向上を図っていくことを期待する。 	

特別展評価シート(3/3)

ニーズに 即し効果 的な事業 展開	評 価 点	・洗練された陶磁器を展示している美術館として、入館者が館に期待するものが年々高度なものになっている中、観客の声に耳を傾けながら、改善に努めている姿勢を評価したい。
	改 善 点	・展示会場が狭く、展示、導線の設定上数々の制約があることから、今後も様々な工夫をしながら会場の設営と運営に努めていく必要がある。今後とも、快適な空間づくりに尽力してほしい。

総評	評 価 点	<p>・美術品をじっくり見せる、名品展示が主流の美術館の展示に、博物学的要素を取り入れた展示手法により、美術品とその美術品にかかわる人間の姿を立体的に描き、“人生を感じさせる展示”に仕立てたことを評価する。</p> <p>・展覧会担当の学芸員が韓国の地方窯についての綿密な調査を行っており、展覧会の開催年度に多数の研究成果を発表している。この展覧会が、地道な知的活動から生み出された成果の上に成り立っていることに敬意を表する。</p> <p>・学術成果を踏まえた質の高い展示を実現しながら、目標を上回る入館者数、収入額を確保したことを評価する。</p>
	改 善 点	<p>・東日本大震災以降、日本各地で地震や津波への対策が喫緊の課題になっている。東洋陶磁美術館は、川のそばに立地しており、災害への対応策について十分点検し、万全の策を講じてほしい。</p> <p>・一般向けの大阪の観光ガイドの中には、東洋陶磁美術館についての記述がほとんどないものもある。東洋陶磁美術館の知名度をあげ、大阪市の誇るべき文化施設として広く知らしめるため、観光業者やガイドブックの制作者に館の存在をアピールすることを期待する。</p>